

## 大原孫三郎の職工対策と大原總一郎の町並形成

In-company training by Magosaburo OHARA and Modern City Planning by Soichiro OHARA

小西伸彦（就実大学）

Nobuhiko KONISHI: Shujitu University

**要旨:**江戸時代の町家の風情が色濃く残る倉敷の町の近代は、倉敷紡績（クラボウ）によってつくられたと言っても過言ではない。倉敷紡績の発展とともに銀行や発電所、本社屋や寄宿舍などが建てられ、それにともない道路網も整備された。そこには倉敷紡績と倉敷絹織（倉敷レーヨン、クラレ）を経営した大原孫三郎と總一郎父子のリーダーシップと影響力があった。小稿では、倉敷紡績が倉敷市街に完成させた産業システムの中から、大原孫三郎の人格主義が生み出した寄宿舍を紹介し、昭和30年代に造成が始まった水島臨海工業地帯により、軽工業から重工業へと大きく舵を切った倉敷が生んだ都市景観について若干の考察を試みる。

**キーワード:** 倉敷紡績、寄宿舍、都市景観、大原孫三郎、大原總一郎

**Key Words:** Kurashiki Cotton Spinning Co.Ltd., Boarding house, Cityscape, Magosaburo Ohara, Soichiro Ohara

### はじめに

倉敷市を含む岡山県南地域はかつて「吉備の穴海」と呼ばれる遠浅の海であった。しかし高梁川などの河川が運ぶ土砂の堆積、江戸時代に本格化した海面埋立事業により耕地や市街地へと変わっていった。ところが塩分を含む干拓地で栽培できたのは綿花や藺草などであったため、綿製品や畳表、花菱莖づくりが盛んになった。綿製品が最初につくられたのは1789（寛政元）年の児島田ノ口（琴浦）で、製品は真田であった<sup>1)</sup>。明治時代になると玉島に玉島紡績所、児島に下村紡績所、倉敷代官所跡に倉敷紡績所<sup>2)</sup>が設立され、倉敷は綿紡績の町として発展した。

第二次世界大戦の戦禍を免れたことで、倉敷の町は江戸時代からの家並みと紡績の産業システムが同居する形で残された。昭和30年代の日本では石炭から石油へのエネルギー転換をはかるとともに、日本国有鉄道と地方公共団体、地元産業が出資する臨海工業地帯の造成が本格化した。水島臨海工業地帯の造成と、それともなう重工業都市・倉敷の建設に関わり、倉敷市街の戦後建築をリードしたのが大原總一郎（以降、總一郎）である。

1969（昭和44）年4月、戦後操業を停止していた倉敷紡績本社工場<sup>3)</sup>の中に、創立80周年を記念

した「倉紡記念館」が完成した。倉敷市は同年7月、「倉敷市美観条例」を施行し、金沢市に次ぐ全国二番目の歴史的建造物による町並み保存活動を始めた。倉敷が観光地として注目されるようになったのは、大阪で万国博覧会が開かれた1970（昭和45）年、日本国有鉄道が始めた「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンからである。1972（昭和47）年5月には倉敷紡績本社工場東隣の寄宿舍跡に、1,974名を収容する倉敷市民会館が開館し、倉敷紡績本社工場はホテルやレストラン、結婚式場、工房などからなる複合施設「倉敷アイビースクエア」に改修され、1974（昭和49）年4月にオープンした。産業遺産が産業考古学的検証を経て保存活用された国内最初の例である。

### 大原孫三郎の職工対策

倉敷紡績が今日のクラボウとして発展を続けるうえで、大きな足がかりを創り出したのが二代目社長・大原孫三郎（以降、孫三郎）である。

#### 1. 倉敷紡績所の創業

「倉敷」の語源の一つとして考えられているのが、中世から近世における領地支配で使われた「倉敷地」という言葉である。「倉敷地」とは、中世の荘園や近世の大名領・幕府領

などの領地・支配地における年貢や貢納物を領主の所在地に送るとき、物資を一時保管しておく場所、およびその建造物(倉庫)を指す。建ち並んだ「蔵屋敷」が「倉敷地」に転訛したものといわれ、蔵(倉庫)に物品を預ける保管料を「倉敷料」「敷料」と呼んだ。「倉敷地」が地名として使われ続けている代表が岡山県倉敷である。

1609(慶長14)年ごろの倉敷には172の水夫屋敷が軒を連ねたと伝えられているが、その場所は浅瀬の海から陸地が変わったかつての海岸線であった。そして、陸地の拡大とともに人工の運河が開削され、その岸に蔵屋敷が建てられるようになった。今日の家並みの原型はこうしてつくられたのである。

1889(明治22)年10月20日、倉敷紡績所倉敷工場が操業を開始した。その歴史は1886(明治19)年12月19日、創立者の一人である小松原慶太郎が紡績所の設立を訴えたことに始まる。翌1887(明治20)年1月、小松と大橋沢三郎、木村利太郎、林醇平が发起人となって倉敷紡績所を組織し、1888(明治21)年3月4日の創立総会で大原孝四郎(以降、孝四郎)が頭取(社長)に就任した。

倉敷工場は倉敷川に近い倉敷代官所跡に建設された。ところが1891(明治24)年4月25日、山陽鉄道神戸・倉敷間が開業すると、原綿や製品、石炭の輸送は川船から高速・大量・安全輸送を得意とする鉄道に切り替えられた。倉敷駅が開業する10日前の4月15日には、資本金3万円で倉敷銀行が設立され、孝四郎が頭取に就任した。倉敷紡績所は創業以来、大原家からの短期資金借り入れでやり繰りしてきたが、業務の拡大で大阪などとの取引が増え、岡山市の第二十二国立銀行だけでは十分な対応ができなかったのである。

## 2.大原孫三郎の改革

孫三郎の生涯を著したものには城山三郎の『わしの眼には十年先が見える 大原孫

三郎の生涯(飛鳥新書、1994年)』や兼田麗子の『大原孫三郎 善意と戦略の経営者(中公新書、2012年)』、阿部武司の『大原孫三郎 地域創生を果たした社会事業家の魁(PHP研究所、2017年)』などが知られているので、生涯等は良著に譲り、小稿では孫三郎が最初の事業改革として取り組んだ職工問題を取り上げる。

### 2-1.教育

孫三郎が倉敷紡績に入社したのは1901(明治34)年1月である。そこで目にしたのが工女の質の低さと劣悪な労働環境であった。寄宿舎は大部屋式で、一つの万年床を昼夜交代12時間労働の工女二人が共有するという状態であった。その不衛生さから結核などに伝染する工女も多かった<sup>4)</sup>。細井和喜蔵が『女工哀史』を発表したのは1925(大正14)年であったが、倉敷紡績所の労働環境は細井のルポルタージュさながらの状態であった。孫三郎はまず、工女を対象とした職工教育と倉敷町民の文化向上をはかるために1902(明治35)年1月、倉敷高等男子学校と倉敷高等女子学校の校長らと「倉敷教育懇話会」を組織した。つぎに同年3月12日、職工教育として「倉敷紡績株式会社職工教育部」を設立し、4月1日、倉敷工場の寄宿舎の中に尋常小学校を開設して、倉敷尋常小学校の教員による嘱託授業を始めた。また7月17日には私立倉敷商業補習学校を設立し、みづから校長に就任した。私立倉敷商業補習学校は現在の岡山県立倉敷商業高等学校である。倉敷町の教育振興に向けては同年12月14日、「第一回倉敷日曜講演会」を開催し、1925(大正14)年8月2日まで76回続けた<sup>5)</sup>。

孫三郎は1906(明治39)年から職工の寄宿舎問題にメスを入れ、不衛生であった二階建大型寄宿舎を分散式家族的寄宿舎へと改革するのであるが、新しい寄宿舎の工事が進む1910(明治43)年12月17日、文部大臣から「倉敷工手学校設立認可」を受けた。1902(明治35)年からの工女教育が実

績をあげたことで、増え続ける青年男子を対象とした教育の必要が高まったのである。他の企業に先んじた工手学校は1911（明治44）年6月に完成し、専属の主任教員と数名の嘱託小学校教員を雇い、同年7月、約20名を入学させた。倉敷工手学校の概要はつぎのようであった。

年限：2ヶ年

資格待遇：体格検査に合格したる高等小学校卒業の15歳以上25歳未満の男子を実習工として本社工場に勤務せしめ、7月1日より本校に入学せしむ、実習見習工勤務中は指定の宿舎に収容し、日給15銭を給す  
学科：第一学年；修身、算術、理科、製図、読方、書方、英語

第二学年；修身、算術、理科、工作法、紡績一般、製図、読方、書方、英語<sup>6)</sup>

## 2-2.寄宿舍

職工問題の元凶は、1,000人以上を収容する狭隘な二階建大寄宿舍の住環境にあった。炊事場や食堂は非衛生で、夜具は昼夜二交代の工女二人に一つしか与えられていなかった。そんな劣悪な状態をつくりだしていたのが「飯場制度」であった。職工の雇用から日常管理までを委託された3名の請負業者は、職工の入退社に関わる紹介料や手数料、寄宿舍の炊事賄い、入寮者へ日用品販売にいたるすべてでピンはねし、私腹を肥やしていたのである。創業から10年続く因習は、炭鉱の飯場制度を思わせるほどであったが、会社側も手を出すことができずにいたのである。

孫三郎は1906（明治39）年1月、毅然とした態度で飯場制度を廃止し、採用から炊事までのすべてを直営とした。倉敷紡績は炊事場と食堂の改築に着手したが同年6月、チフスが蔓延して犠牲者が出た。チフス事件を機に孝四郎が社長を退き、9月2日、孫三郎が二代目社長に就任した。

孫三郎は、二階建寄宿舍の全廃と分散式家族的寄宿舍の建設を決定した。しかし、それには広大な敷地と多額の建設費が必要

であったため、反対する取締役も現れた。好景気が続いた1905（明治38）年から1907（明治40）年まで、倉敷紡績は3割から4割の高配当を行った。ところが、株主からは従業員の福利厚生施設などに投資するのではなく、より高い配当を求めるという声があがった。しかし孫三郎は、建設中の二階建寄宿舍の工事を中止し、不要になった建築資材を岡山市の山陽高等女学校に寄付し、分散式家族的寄宿舍の建設を断行した。

倉敷紡績は1907（明治40）年12月、あらたに買収した土地を含めた12,480坪に136戸の寄宿舍を完成させた。分散式家族的寄宿舍は1棟に4室が設えられ、各室には6畳と2畳の居室と2畳の土間が配された。衛生と採光に配慮し、棟は南向き平行におかれ、棟と棟のあいだには花壇が設けられた<sup>7)</sup>。

分散式家族的寄宿舍の完成にあたり、孫三郎は寄宿生につぎのような訓話を与えた。倉敷紡績はそれ以降、この考えに沿った理想的寄宿舍、職工村づくりを続けた。

- ・みなさんの内に病人のないようにしたいと思って寄宿舍を建て替えました
- ・物品配分所を設けてみなさんに徒な金をつかわせないようにしました
- ・学校もりっぱなものをつくって、みなさんが一人前の女として文字も読め、裁縫もできるようにしたいと考え、寄宿舍を改善しました
- ・わたしの考える人道教育主義は、みなさんを立派な人間にするようお世話することです
- ・なるべく自分の家と変わらぬように設備し、少人数の者が居心地よく睦まじく、家庭的に寝起きできるような寄宿舍にしました
- ・寄宿舍には裁縫室を建て、学校もつくる予定です
- ・各部屋のあいだには花壇を設け、四季の花を絶やさないようにしました
- ・食堂も立派なものに建て替えました
- ・休みのときにはみなさんが集って楽しく芝居や話しができるよう舞台も備え付



ける計画です

- ・みなさんの居心地をよくし、病人もなくし、無駄な金をつかわず、父兄に送金も多くでき、貯金もたくさんできるようにしたいと思っているので、みなさんには仕事や勉強に精を出し、幸福な寄宿舎生活を過ごしていただきたいと考えています<sup>8)</sup>

## 2-3.織工村

孫三郎が分散式家族的寄宿舎に投資したのは、工女の人権と健康を守り、教育文化の向上をはかるという人格主義的目的はもちろん、工女の勤続年数を伸ばし、生産効率をあげ、採用や教育にかかる費用を抑えるという目的もあった。孫三郎は社内に人事研究会を組織し、賃金、福利厚生施設の建設費、勤続年数や募集に必要な旅費や紹介料にいたるまで細かく計算させた。ところが工女の勤続年数は相変わらず短く、熟練工の雇用も容易ではなかった。人事研究会は1909（明治42）年12月4日、「通勤部拡張ニ関スル意見書」をまとめ、募集費用のかかる出稼ぎ工女の割合を減じ、社宅を建設して勤続年数の長い労働者家族を育成する方が効果的であると報告した。報告を受けた孫三郎は、女工の寄宿制度から社宅通勤主義に改め、労働者家族の育成を目指すことにした。労働者家族育成計画は「職工村」あるいは「工場村」政策とも呼ばれ、1915（大正4）年5月5日に操業を開始した万寿工場で採用された<sup>9)</sup>。

本社工場と玉島工場に次ぎ、第三の生産拠点となった万寿工場は3万鍾とされた。倉敷駅から引き込み線を敷設し、鉄道主海運からの輸送体を取り、同年1月2日に稼働を始めた倉敷発電所から電力の供給を受けた。万寿工場もう一つの変更点が職工対策であった。人事研究会が提案する社宅通勤主義を取り入れた孫三郎は、つぎの考えをもとに寄宿舎から社宅通勤に舵を切った。

日本の紡績工場が粗笨工業の域を脱することができないのは、男女従業員の勤続が短いことに原因があり、精巧工業にするには勤続を長くし、熟練工を養成する必要がある。職工を遠方から連れてきて寄宿舎に入れたのでは頻繁な移動を免れることはできない。し

たがって熟練工を養成することはできない。労働問題の弊害は、労働者が家庭を離れて寄宿舎に群居することにある。そこで、社宅に住み、土地に根をおろした労働者が、自分たちの工場を中心とした織工村をつくり、「工場を住民の共同作業場たらしめる」な工場とすることが必要である。また労働者をつねに土に親しませることが大切である。出ては工場に携わり、入りては鋤をもって土に親しむことができるような田園都市風な工場中心の社宅を理想とする<sup>10)</sup>。

万寿工場の「田園都市風」社宅は全戸平屋建てで、1戸10坪に6畳、4畳半、2畳の居室、炊事場、便所、庭園等を配し、約89,000㎡平方メートルに600戸を建てる計画であった。しかし、第一次世界大戦開戦直後の不況のため当初計画を変更した。まず直営工事として着工し、1915（大正4）年6月竣工の第一期工事で26棟104戸、同年7月の第二期工事で26棟104戸が完成するなど、110棟440戸が完成した。万寿工場の職工社宅は1棟4戸構成で4戸建、2棟が平行に向き合う形で配置され、棟と棟の間には野菜畑が設けられ、敷地内には労働者の家族の子供が通える幼稚園が併置された<sup>11)</sup>。

万寿工場は第一次世界大戦の好景気で増産体制にはいったが、労働者家族だけでは職工不足となった。そのため第二工場の建設時には、単身の工女雇用への方針回帰を余儀なくされた。あらたに買収した工場・寄宿舎用地約1万坪に、孫三郎が考案したL字型寄宿舎66棟が建てられた。一区画には、寄宿舎4棟が庭を囲むようにおかれたが、それは平行配置された分散式寄宿舎よりもコミュニティの育成に適した配置であった。寄宿舎は木造平屋建瓦葺きで、各棟に10畳、8畳、6畳、3畳の居室、トイレが付属した。また、浴場、食堂・炊事場、父兄宿泊所、娯楽室・裁縫室、自修室、裁縫室・作法室なども設けられた。同じ敷地には1921（大正10）年7月、倉敷労働問題研究所が設置された<sup>12)</sup>。

## 3.大原總一郎の町並形成

孫三郎の事業や業績が語られる機会が多い半面、總一郎の顕彰が進んでいるかと問われれば、まだまだ不十分であると答えねばならない。それはか

つて大原美術館に勤務した筆者の経験からも明らかである。1930（昭和5）年に開館した本館や、孫三郎と画家・児島虎次郎が収集した西洋絵画、とくにグレコの「受胎告知」やモネの「睡蓮」、セガントーニの「アルプスの真昼」などは広く知られ、それらマスターピースを目当てに来館する人々も多い。本館に比べ、訪れる人が多いとはいえない工芸館・東洋館の展示品も、大半が孫三郎時代に収集されたものである。しかし、工芸館・東洋館は總一郎時代に開館し、米蔵を改築した意匠の各所には芹沢銈介の粋が息づいている。分館を飾る日本の芸術家たちの作品は、梅原龍三郎の1点と山本鼎の1点を除き、すべて總一郎が収集したものである。總一郎と棟方志功との親交は、美術館経営者と作家という立場を大きく超越したもので、總一郎がビニロン開発のために制作を依頼した「美尼羅半頌板画柵」や、倉敷国際ホテルの吹き抜けを飾る「大世界の柵・坤」は二人の心の交流を物語る秀作である。

### 3-1.薬師寺主計

大原美術館本館を設計したのは薬師寺主計である。1884（明治17）年、岡山県総社に生まれた薬師寺は、大原奨学生として東京帝国大学工科大学建築科を卒業後陸軍省に入省し1926（大正15）年、陸軍中將で退官した。第一合同銀行倉敷支店（1922年）以降、孫三郎のもとで倉紡中央病院（1923年、倉敷中央病院）、奨農土地本社（1926年、喫茶エル・グレコ）、第一合同銀行本店（1927年、現存せず）、有隣荘（1928年）などを設計した。

### 3-2.浦辺鎮太郎とヴァナキュラー・アーキテクチャ

總一郎とともに倉敷の近現代建築を多数設計したのは、總一郎と同じ1909（明治42）年、倉敷に生まれた浦辺鎮太郎である。京都帝国大学工学部建築科在学中、ヴァナキュラー・アーキテクチャに興味を深め、オランダ人建築家ウォレム・M・デュドックの作品に共感した。浦辺とヴァナキュラー・アーキテクチャについて、建築史家の長谷川堯はこう指摘する。

浦辺は、京大の学生時代にすでに、「時代性にこだわらない風土性ある建築」、つまり、「ヴ

ァナキュラー・アーキテクチャ」と呼ばれるような一連の建築がもっている、建築史上での特別の意義と魅力に気づいていたのかもしれない。その土地の材料や技術や表現を用いて、建築の歴史の表舞台で繰り広げられるような、様式の変遷や重層とはほとんど無縁に、同じ場所で、延々と変わることなく、同じように造られ続けていく民家のような、土着的で、「標準語」ではなく、逆に“方言的な”建築への浦辺の深い共感。このヴァナキュラーへの指向性もまた、十九世紀後半のイギリスの建築家たちが、彼らの基本的美学として共有していたものであったが、当然そうした視点は（一部略）、浦辺のその後の設計活動に直接連動して、大きく展開していったものであった<sup>13)</sup>。

長谷川は、学生の浦辺がフランク・ロイド・ライトへの関心を深め、ライト最初の弟子・遠藤新の教えを受けたこと、日本にいち早くライトを紹介し、浦辺が2年生のときに京大を退官した武田五一が学生たちに伝えた、欧米の建築デザインの革新運動の背景にイギリスのアーツ・アンド・クラフトがあることに触れ、デュドックのデザインがアーツ・アンド・クラフトに行き着くと指摘する。『浦辺鎮太郎作品集』に掲載された浦辺語録に、「デュドックの影響」がある。

ぼくも若いころから途方もないことを考えるしね。倉敷のデュドック（Dudock）になってやろうと考えたんだ。あの人はそのころ活躍していてね、アムステルダム大学を出ただけだけど、ヒルバーサムという当時人口五万くらいの町の市役所に勤めてね、そして建築家となってその町の大事なものはほとんど一人でみんなやっちゃった。倉敷の町も当時同じくらいの人口だった。（中略）ぼくの卒業設計を見てもデュドックばかりですよ。真似したんだから<sup>14)</sup>。

柳宗悦の民藝運動に集った濱田庄司や河井寛次郎、棟方志功らの作品を展示する大原美術館工芸館を開館させたのは總一郎である。孫三郎と總一郎が共感し、活動を支えた民藝運動とヴァナキュラーには大きな共通点があると考えられる。倉敷とヴァナキュラーを考えると、林源十郎や孫三郎が

発起人となり、1923（大正 12）年に完成した倉敷教会堂を取りあげない訳にはいかない。設計者の西村伊作は 1884（明治 17）年 9 月、和歌山県に生まれた教育者であり実業家である。大正と昭和時代を代表する建築家で、画家、陶芸家、詩人で、文化学院の創設者でもある。西村記念館として公開されている新宮市の自宅は重要文化財、倉敷教会堂は登録有形文化財である。

倉敷教会堂の設計契約はヴォーリズ事務所との間で結ばれたが、違約金を支払って西村に委託された。教会には石積みが多用され、それが建築上の大きな特徴である。石は、北木島のある岡山県笠岡諸島から運ばれた<sup>15)</sup>。建築史家の田中修司は、西村の「今後の新しい日本の住宅のために、私は日本の昔からその土地にある民家の様式をなるべくそのまま用いたい、その柱や小屋組の構造も、外壁の作り方も、屋根の作り方も、出来るだけ民家の様式に作りたいと思うのです（西村伊作「旧日本の民家の様式」、1921 年）から、西村がきわめて早くからヴァナキュラーな要素を活かすこと意識していたと指摘する<sup>16)</sup>。

### 3-3.大原總一郎のローテンプルク構想

總一郎と浦辺は 1934（昭和 9）年、倉敷絹織に入社し、浦辺は薬師寺主計が総責任者を務める営繕課に配属された。1936（昭和 11）年、薬師寺が倉敷絹織を退社し、總一郎は 2 年間の欧米視察に出発した。總一郎は浦辺の勧めでオランダのヒルヴェルスムを訪ね、デュドックが設計した建物を見学した。帰国した總一郎は 1938（昭和 13）年、浦辺にドイツの中世都市ローテンプルの城塞都市に深い感銘を受けたこと、倉敷はローテンプルクに劣らないこと、倉敷を日本のローテンプルクにしようと話した<sup>17)</sup>。

### 3-4.倉敷市庁舎の完成

岡山県は 1948（昭和 23）年度、水島港の大規模拡張工事に着手し、臨海工業地帯の建設を本格化させた。それにより、倉敷の中心市街地整備と市庁舎の拡張が急務となった。倉敷市は 1952（昭和 27）年、道路、下水道、市庁舎、公民館、図書館を中心とした都市の核づくり計画案を立て、建築学者の岸田日出刀や都市計画家の高山英華を招聘

した。総合計画は 1954（昭和 29）年に完成し 1958（昭和 33）年、ランドマークとなる新市庁舎の設計が岸田の推薦を受けた丹下健三に委ねられた。

丹下が設計した市庁舎は 1960（昭和 35）年 6 月 11 日、建設費 1 億 8,800 万円で完成し、建築面積 2,088 m<sup>2</sup>、延床面積 7,312 m<sup>2</sup>に地下 1 階、中 2 階をもつ地上 3 階建の威容を現した。校倉造りを思わせるコンクリート打放しの外壁と、スパン 20m を超す梁、外壁全体に配されたプレキャストコンクリートの特徴とする市庁舎は、江戸時代の面影を色濃く残す倉敷市街地に最初に建てられた巨大コンクリート建築物であった。

浦辺は「倉敷のまちづくり、1981 年」に、倉敷絹織に入社したとき「デュドックと同じように、故郷倉敷の町の市庁舎を設計するのだ」と記したが<sup>18)</sup>、市庁舎の設計は丹下に依頼されたのである。

### 3-4.大原美術館分館

大原美術館収集品の対象を表現主義以降、そして日本の西洋絵画や彫刻に拡大させたのが總一郎である。倉敷市庁舎が完成した翌年の 1961（昭和 36）年、日本の西洋絵画や彫刻の展示室として開館したのが大原美術館分館である。總一郎は、大原美術館分館の設計を浦辺に委ねた。設計にあたり浦辺は、みずから「クラシキ・モジュール（KM）」と呼ぶ、古くから倉敷に伝えられてきた基準寸法 960mm と 1,920mm を採用した<sup>19)</sup>。そして中庭のインテリアなどに、町家の内部空間に見られる陰影を与え、白壁にデザインした黒瓦の水平ラインで全体を統一した。また、鉄筋コンクリート造シェル構造の屋根をかけ、ガラスブロックを多用するなど、先進技術と材料を用いた。大原美術館分館は、倉敷市庁舎と道路を挟んだ北東の、新溪園の中に建てられた。市庁舎は繊維の町、軽工業の町として発展した倉敷が、水島臨海工業地帯の誕生で重工業の町へと発展するランドマークである。水島に起こったモダニズムの波は、伝統的な倉敷の町並みに容赦なく打ち寄せてくる。木でできた古い倉敷の町並みを、都市化、近代化から守る「城壁」として考えられたのが、大原美術館分館の南壁である<sup>20)</sup>。浦辺は「古い倉敷の新しい城壁（『建築文化』、1961 年 6 月号）でつぎのように述べている。



この別館は保存地区としての元倉敷と今後開発されるべき新倉敷（市庁舎を先頭に後に水島工業地帯を持つ）のボーダーラインにある。私としては、この線をもって保存地区を守る城壁にしたいという発想であった。そこで、古い町家の高さを考慮したスケールと白黒の色調を採用したが、幅の方は当然敷地いっぱいにとった<sup>21)</sup>。

### 3-5.倉敷国際ホテル

水島の急激な工業都市化で、倉敷市街に都市型ホテルが必要だという声が高まった。提唱の第一人者が總一郎である。總一郎はスコットランド旅行の経験から、倉敷のホテルに必要な要素は、旅人の精神的安息の場となり、風景や歴史、人情の窓となり、宿自体を町の風物の一部と感じてもらえることで、「ウィークエンドハウスのような小ホテルが最も好ましい」と考えた<sup>22)</sup>。浦辺は總一郎の思いを設計に活かし1963（昭和38）年、大原美術館の西側、倉敷市庁舎と道路を挟んだ北東の場所に倉敷国際ホテルを完成させた。外観は、浦辺が設計し1960（昭和35）年に完成した日本工芸館に始まる、打放しコンクリートの斜め壁庇と黒瓦の水平ボードとした。屋上庭園の壁と塔屋も同じモチーフとし、統一感のある瀟洒な表情をもたせた。ロビーの吹き抜けに飾られ、2階と3階の目隠し役を演じているのが棟方志功の木版画「大世界の柵・坤」である。長谷川は倉敷国際ホテルの外観をつぎのように解説する。

このホテルの外観は、都市の囲壁のような外観をもち、町並みの中に巧みに沈み込ませていた「大原美術館分館」のデザインとは異なり、逆に、大原美術館と元倉敷の伝統的な町並保存地区を背後に置きながら、倉敷の旧市街の中心域全体にとっての、いわば“天守閣”ともいえる象徴的な立場を担わされて登場した建築であった。ホテルの立面には、あたかも武士が鎧をまとして座しているかのよ

うに見える、といった形容が時にされた（以下略）<sup>23)</sup>

### 3-6.倉敷構想と四方隅平櫓

三菱社は1890（明治23）年、政府から購入した東京の丸の内と神田三崎町の35万2,000㎡に、ジョサイア・コンドルが設計した煉瓦造りのビル群を建設した。一帯はモダンなオフィス街となり、「一丁ロンドン」と呼ばれたが、總一郎も1963（昭和38）年12月、浦辺に「一丁シャンゼリゼ」というアイディアを話した。浦辺は1964（昭和39）年の日記にこう書き残している。

倉敷計画をやらないといけない 駅から市庁舎に至る町づくりをやりたいが倉建（倉敷建築研究所）でやってくれるかと市長が言っておった。倉建も忙しいので条件次第だと言っておいたが、受けられるか。（中略）ブロック割にするほうが良いと思うが、いずれにしても倉建でやるしかない。私は倉敷の一丁（プチ）シャンゼリゼと呼べるものにしたい。上階に程度の高いアパートが必要であろう。裏町には飲み屋も入る。人が美術館だけでなく、町を見に来るようにならんといかん。

西村清是が1961（昭和36）年から1984（昭和59）年の浦辺ノート調べたところ、「倉敷計画」が登場するのは總一郎が没した翌年、1969（昭和44）年であった。浦辺は總一郎が亡くなった3日後、「倉敷構想」のイメージをスケッチして部下に示し、總一郎の思いを伝えた。しかし、「一丁シャンゼリゼ」構想が記録に現れるのは1969（昭和44）年であった。思いどおりには進まなかったのである。

1969（昭和44）年、浦辺は、倉敷建築研究所の所長室に、倉敷中心市街地の青焼き白地図を貼り出し、それを「倉敷計画」と呼んだ。「1969AUGUST」と朱書された地図には、1km四方の正方形が城郭を示すように落とし込まれ、試案や実現したプロジェクトが順次書き加えられていった。四方の城郭、四方隅櫓の位置はつぎのようであった。北西は倉敷市が調査を始める倉敷駅前開発エリア。北東は倉敷中央病院。南東は浦辺が設計を進める倉敷市民会館。南西は浦辺が新市庁舎建設位置と

考えていた場所で、そこには現在、倉敷市芸文館がある。浦辺が「倉敷構想」と呼んだ四方隅櫓構想は、ローテンプルク構想に始まる總一郎の考えを発展させたもので、浦辺は後年、「歴史的景観都市が1km 四方であることは自らの発見である」と語ったと伝えられている。

1969（昭和44）年10月、浦辺は「倉敷構想」を提案書にまとめ、骨子につぎの言葉を盛り込んだ。

大原構想より発していること 店舗と住宅の共存出来る再開発であること 元町通は大倉敷市の窓口の盛り場 一丁（プチ）シャンゼリゼの名に値したもの 望ましい総合的再開発 提案の範囲と内容として、一丁シャンゼリゼは全市をカバーするマスタープランの中心ではあるが全部ではなく、少なくとも元倉敷（1km 四方）をカバーするマスタープランを描いたうえで、それと綿密な関係の下に本提案を致すこと

「倉敷構想」の中で注目すべきは、倉敷紡績本社工場の跡地利用であった。浦辺は1969（昭和44）年11月、「倉敷構想」を倉敷市に正式提案する計画であった。それに先立ち倉敷紡績に、「一丁シャンゼリゼ」構想と本社工場の保存計画の公表を打診した。しかし倉敷紡績は当時、本社工場とその東側の社宅敷地の跡地利用を倉敷市と協議していたため、時期尚早であると判断した。東側の社宅敷地とは、倉敷工場時代に分散式家族的寄宿舎が建てられ、1972（昭和47）年に倉敷市民会館が建設される場所である<sup>24）</sup>。

## おわりに

UR 設計の代表を務めた辻野純徳は、『高梁川』に「大原の夢と大原構想」を寄稿した。

1939年欧米視察から帰国した大原は、浦辺に頼まれて訪問したW・M・デュードック設計のオランダの地方都市ヒルヴェルサム市庁舎の写真と共に、ゲマインシャフトの街ローテンプルクを語り「倉敷の町もローテンプルクにしよう」と。1955年に始まる大原美術館分館（1961年竣工）で、浦辺は、外壁を古い倉敷の新しい城壁として造り、ローテンプルクに倣う。1964年、国民生活向上対策審議会

会長に就任した大原は、日本列島のマスタープランを提言、倉敷を運命共同体のモデル地方都市にしようと語る。浦辺が大原構想という言葉を使い始めたのは、1967年の音楽図書館の記録からで、大原の遺志と受け取った為と思われる。1969年倉敷中央病院設計のための調査が始まり、駅前再開発が見えはじめ（正式には1971年）夏には市民会館の敷地が倉紡倉敷工場東の分散寄宿舎跡に決まった頃、浦辺の部屋の窓に倉敷市の地図が貼られ、市庁舎（旧）を含めた四点を角櫓に見立て、これを結ぶ1辺1 $\frac{1}{2}$ の正方形が書き込まれる。“ローテンプルクは600 $\frac{1}{2}$ 四方、城壁で囲われ角櫓は高く、内部は低く造っているがよい”と大原の語るイメージを重ね、四隅に執着し、大原構想と称する。11月には西の城壁ともいふべき駅前から国際ホテルまでの“元町通り再開発計画試案”を市に提出、道の両側に並木とアーケイドが旧倉敷入口まで連なり、1、2階は店舗、3～6階は職住近接のまさしく大原の語った街づくりである<sup>25）</sup>。

「ローテンプルク構想」に始まった總一郎の「一丁シャンゼリゼ構想」は、浦辺の「倉敷構想」「大原構想」へと発展した。倉敷市は1969（昭和44）年7月、「倉敷市美観条例」を施行した。元倉敷と呼ばれる、江戸時代から昭和時代の建物が共存する倉敷市本町と東町の「倉敷市倉敷川畔」は1979（昭和54）年5月21日、商家町として重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定された。伝建地区が「倉敷美観地区」と呼ばれる観光エリアである。倉敷市街は、倉敷紡績の発展とともに近代化を遂げ、孫三郎が産業システムを完成させた。軽工業・繊維の町から、水島臨海工業地帯による重工業の町へと発展した町でもある。倉敷美観地区形成の基礎となったのが大原總一郎の「ローテンプルク構想」、浦辺鎮太郎の「四方角櫓構想」である。

倉敷の産業システム、つまり倉敷紡績の産業システムを語るには、小稿で取りあげた寄宿舎や職工村だけでは用を足さない。大原イズムを知るには、巨視的に孫三郎と總一郎の業績を捉えなければならない。小稿はその第一歩として、孫三郎が



いち早く、ドイツのクルップ社を研究させながら開始した労働環境改善に注目し、初期産業システムの一例に触れた。確立された紡績の産業システムを現代の都市景観へと導いた基本構想として總一郎と浦辺を取りあげた。倉敷は古きを訪ね、先人の思いに触れることができる町である。

#### 謝辞

浦辺鎮太郎や倉敷構想、四方隅櫓構想に関する資料をご提供くださいました、UR 設計の辻野純徳相談役と米山剛史一級建築士にお礼申し上げます。

#### 文献

- (1) 備前織物同業組合編『備前織物の今昔』、備前織物同業組合、1919 年。
- (2) 倉敷紡績社史編纂委員編『回顧六十五年』、倉敷紡績、1953 年。
- (3) 阿部武司『大原孫三郎 地域創生を果たした社会事業家の魁』、PHP 研究会、2017 年。
- (4) 大原孫三郎伝刊行会編『大原孫三郎伝』、中央公論事業出版、1983 年。
- (5) 産業遺産学会編『倉敷日本遺産研究論集』、倉敷市教育委員会、2022 年。
- (6) 長谷川堯『建築の出自 長谷川堯 建築家論考集』、鹿島出版会、2008 年。
- (7) 馬場璋造、臼田哲男編『浦辺鎮太郎作品集』、新建築社、2003 年。
- (8) 住友和子編集室、村松寿満子編『愉快的家 西村伊作の建築』、INAX 出版、2011 年。
- (9) 松隈洋、笠原一人、西村清是編著『建築家 浦辺鎮太郎の仕事』、学術出版社、2019 年。
- (10) 倉敷国際ホテル編『倉敷国際ホテル 50 年の歩み』、倉敷国際ホテル、2013 年。
- (11) 高梁川流域連盟編『高梁川』第 66 号、高梁川流域連盟、2008 年。

#### 引用文献

- 1) 「備前織物の沿革」(備前織物同業組合編『備前織物の今昔』、備前織物同業組合、1919 年)、1 頁。
- 2) 倉敷紡績所は 1893 (明治 26) 年 10 月 13 日、倉敷紡績に商業変更した。「商法施行による會社名變更 (倉敷紡績社史編纂委員編

- 『回顧六十五年』、倉敷紡績、1953 年)、75 頁。
- 3) 創業時は倉敷工場と呼ばれていたが、1908 (明治 41) 年 11 月 28 日に吉備紡績所を買収して以降、玉島工場に対して、倉敷工場を本社工場とした。「玉島工場の誕生」、前掲『回顧六十五年』、124 頁。
- 4) 「分散式家族的寄宿舎の創出」(阿部武司『大原孫三郎 地域創生を果たした社会事業家の魁』、PHP 研究会、2017 年)、47 頁。
- 5) 「工場経営の刷新」、前掲『回顧六十五年』、98～99 頁。「倉敷日曜講演会の創設」(大原孫三郎伝刊行会編『大原孫三郎伝』、中央公論事業出版、1983 年)、50～51 頁。
- 6) 「倉敷工手学校及び付属男子寄宿舎」、前掲『回顧六十五年』、116 頁。
- 7) 中野茂夫「倉敷の生産システムと産業遺産」(産業遺産学会編『倉敷日本遺産研究論集』、倉敷市教育委員会、2022 年)、3 頁。
- 8) 「寄宿舎・社宅の大改修計画」、前掲『回顧六十五年』、110～114 頁。
- 9) 中野前掲書、4 頁。
- 10) 「万寿工場の建設」、前掲『回顧六十五年』、147～148 頁。
- 11) 中野前掲書、4 頁。
- 12) 同、5 頁。
- 13) 「人・建築との出会い」(長谷川堯『建築の出自 長谷川堯 建築家論考集』、鹿島出版会、2008 年)、204～205 頁。
- 14) 「浦辺語録」(馬場璋造、臼田哲男編『浦辺鎮太郎作品集』、新建築社、2003 年)、164 頁。
- 15) 「石積みの塔とスロープのある教会 倉敷教会」(住友和子編集室、村松寿満子編『愉快的家 西村伊作の建築』、INAX 出版、2011 年)、48～49 頁。
- 16) 黒川創「ハンドメイドで生きた人」、同、28 頁。
- 17) 「大原總一郎と「営繕技師」」前掲『建築の出自 長谷川堯 建築家論考集』、206～207 頁。
- 18) 同、204 頁。
- 19) クラシキ・モジュール」、同、217 頁。
- 20) 松隈洋「大原美術館分館 (1961 年)」(松隈洋、笠原一人、西村清是編著『建築家 浦辺鎮太郎の仕事』、学術出版社、2019 年)、80 頁。
- 21) 松隈洋編「浦辺鎮太郎の言葉」、前掲『建築家 浦辺鎮太郎の仕事』、207 頁。

- 22) 「新緑大原家の社会・文化事業」、(倉敷国際ホテル編『倉敷国際ホテル 50 年の歩み』、倉敷国際ホテル、2013 年)、43 頁。
- 23) 「建築家・浦辺鎮太郎とその後の作品」、前掲『建築の出自 長谷川堯 建築家論考集』、221 頁。
- 24) 「一丁シャンゼリゼ計画と大原構想」、前掲『建築家 浦辺鎮太郎の仕事』、144～147 頁。
- 25) 辻野純徳「大原構想と建築・民藝」(高梁川流域連盟編『高梁川』第 66 号、高梁川流域連盟、2008 年)、54 頁。

Abstract: The history of the Kurashiki Bikan Historical Quarter began with the Kurashiki Boseki spinning industry. In the history of the Japanese spinning industry, working condition for female factory workers were so poor. Magosaburo Ohara was the first to tackle this problem. First, Magosaburo constructed decentralized family boarding houses. Next, he constructed Permanent dormitory. Moreover, he constructed school, hospital and labor institute. These institutions are one of Ohara's industrial system. Soichiro Ohara, second president of Kurashiki Spinning Co. Ltd. is a leading figure in city planning of Kurashiki. Soichiro proposed to make Kurashiki a town like Rothenburg. After Soichiro's death, it was Shizutaro Urabe who inherited Soichiro's will. It was Soichiro and Shizutaro who created the landscape of Kurashiki today.